

東京大学医学教育 国際協力研究センター



東京大学医学教育
国際協力研究センター

〒113-0033
東京都文京区本郷7-3-1
医学部総合中央館212
TEL 03-5841-3583
FAX 03-5802-1845
E-mail: ircme@m.u-tokyo.ac.jp
http://www.ircme.u-tokyo.ac.jp

No. 4

International Research Center for Medical Education

表題：海野濤山書



センター前の桜並木

CONTENTS

- ◆ 客員教授 Gordon L. Noel オレゴン医科大学教授の6ヶ月間
……………センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔……………2
- ◆ Gordon L. Noel 教授の教育・研究活動……………センター客員研究員 松村 真司……………3
- ◆ 第2回 医学教育ワークショップの報告会について……………センター前教授、現客員教授 福原 俊一……………4
- ◆ 第1回 医学教育国際協力研究フォーラム開催報告……………センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔……………5
- ◆ 医学教育国際協力に関する人材情報データベース構築(報告)
……………センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔……………6
- ◆ 利根川 進先生来室……………センター講師(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門) 水嶋 春朔……………6
- ◆ セミナー「東京大学医学部における医学教育改革の進展」開催報告……………6
- ◆ 医学教育センターを辞するにあたり……………センター前教授、現客員教授 福原 俊一……………7
- ◆ センター日誌／編集後記……………8

客員教授 Gordon L. Noel オレゴン医科大学教授の6ヶ月間

センター講師
(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春期

昨年10月1日に当センターに客員教授として着任された Noel 教授はこの3月末に6ヶ月間の任期を終了され、4月1日、帰国の途に着かれた。

6ヶ月間という短い期間ではあったが、Noel 教授は東大および他大学の医学教育の新しい試みに積極的に参加され、多大なご貢献をなされた。その中心的活動となったのが6回にわたる「医学教育連続講義」である。(タイトルは別掲参照。)

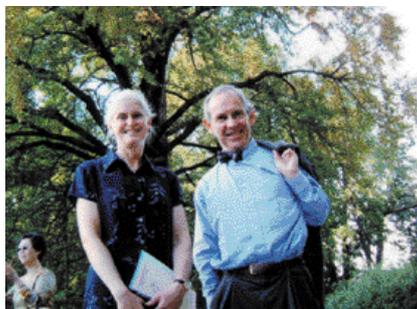
全講義に亘り、学内外の参加者の皆様から毎回ご好評をいただいたのは、米国医学教育の最先端の広範囲の情報と、同時に深い洞察力とで準備された明快な講義内容である。最終回には日米の医学教育の差異を、文化的差異も含めて客観的に比較、総括し、多くの方々から「感銘を受けた」「日本の医学を再考察するよいきっかけになると思う」などのご感想を頂戴した。

学生との交流も精力的でご自身から働きかけて展開された。常にオープンに学生を自室に迎えられ、研修医の方や米国留学を控えた学生にも、また進路を迷っている学生にも同じように親身な御姿勢で対応され、Noel 教授ファンの学生は日を追うごとに増え、2月には有志の学生の希望で、Physical Examination のデモ授業も行われた。

日本国内出張は多方面にわたったが、プライベートに東京を離れてご夫妻で京都、高山、札幌、広島へ旅行され、日本文化への造詣を深められた。鎌倉や日光はもちろぬ、築地市場にも早朝から、ご夫妻、ご家族、ご友人と計5回もお出かけになり、当センター中での一番の築地通となられた。

また1月12日には目白のお住まいでホームパーティーを開かれ、センター関係者一同家族同伴で招かれ、Noel 家の暖かいもてなしに、ご夫妻の親切で心細かな気づかいを深く感じたことも懐かしい思い出である。

本年9月に1週間ほど再来日されることになっており、センター関係者一同、再会を心待ちにしている。



マーガレット夫人と共に



講義風景

ゴードン・L・ノエル教授 滞日記録

2001. 09. 28(金)

ノエルご夫妻 日本到着

2001. 10. 01(月)

着任

医学部長桐野高明教授に御挨拶

10. 15(月)

東京大学外国人研究者交流会参加(小石川植物園散策後、山上会館にて佐々木毅東大総長主催のパーティ)

10. 17(水)

医学部教授総会にて御挨拶

10. 31(水)

第1回医学教育連続講義

(参加人数 25名)

「アメリカにおける医学教育の歴史: History of Medical Education in United States」

2001. 11. 07(水)

学生対象ヒアリング(M3の学生有志4名とのフリーディスカッション)

11. 14(水)

第2回医学教育連続講義

(参加人数 31名)

「クリニカルクラークシップ - アメリカの臨床トレーニングの柱 - : The Clinical Clerkship: The Center of Clinical Training in the United States」

11. 18(日)~11. 21(水)

京都大学出張

11. 19(月)

京都大学医学部にて講演

11. 30(金)

東大医学部国際交流室とミーティング(学生の米国留学プログラムについて)

2001. 12. 01(土)~12. 08(土)

米国へ一時帰国

12. 12(水)

第3回医学教育連続講義

(「第2回医学教育ワークショップ報告会」と同日開催。参加人数 57名)

「アメリカ、カナダ、イギリスのPBTとPBL(問題基盤型教授法・学習法): Problem-based Teaching and Learning in United States, Canada and England」

12. 11(火)~12. 18(火)

複数の学生、研修医、研究員とミーティング

個々の計画についてのアドバイスを行う

2002. 01. 05(土)

教育用ビデオ撮影(東大病院診察室使用)

(第4回医学教育連続講義で使用)

01. 18(金)

国立病院東京医療センター見学

01. 21(月)

クリニカルクラークシップ学内説明会(教官対象)で講演、アドバイス

01. 23(水)

第4回医学教育連続講義

(参加人数40名)

「教官は医学生・研修医の臨床技能を正確に評価しているか? - 教官は誰が良い臨床医かを知っているか? : How well do clinical faculty members evaluate the clinical skills of medical students and residents: do the faculty know who is a good doctor?」

01. 28(月)

赤津晴子先生(「アメリカの医学教育」(日本評論社)著者)センター来訪、懇談

2002. 02. 05(火)~02. 08(金)

北海道大学出張(施設見学、教官、学生とミーティング)

02. 08(金)

クリニカルクラークシップ学内説明会(学生対象)で講演、アドバイス

02. 14(木)~02. 15(金)

浜松医科大学出張(講演)

02. 20(水)

第5回医学教育連続講義

(参加人数 34名)

*MINCS(大学病院衛星医療情報ネットワーク)による全国30大学への中継放送を実施

「医学生と研修医に対する臨床教育計画の青写真-「臨床診断学実習」「PBL」「クリニカルクラークシップ」を超えて:

A Blueprint for Planning the General Education of Medical Students and Residents as Physicians: Beyond Introduction to Clinical Medicine, Problem-Based Learning, and the Clinical Clerkship」

02. 22(金)

M3 学生有志対象

Physical Examination Demonstration

02. 26(火)~02. 27(水)

亀田総合病院(千葉県鴨川市)出張、教育カリキュラム見学



送別会にて

2002. 02. 28(木)~03. 05(火)

舞鶴市民病院、京都大学出張

03. 20(水)

第6回医学教育連続講義

最終回(参加人数 57名)

*MINCS(大学病院衛星医療情報ネットワーク)による全国30大学への中継放送を実施

「要約すると: 一米国人医学教育者が日本の医学教育に抱いた印象 - 優れた点と改善できる点: Summing Up: An American Educator's Impression of Japanese Medical Education - Strengths and Opportunities」

03. 21(木)

目白ロードレース(5km)参加

03. 22(金)

バイオエシックスと医学教育シリーズ第1回シンポジウム 生命倫理と緩和医療にて講演

「Terminal care in the USA and the Oregon Initiative」

03. 26(火)

米国海軍病院(神奈川県横須賀市)見学

2002. 04. 01(月)

成田空港より米国帰国

Gordon L. Noel 教授の教育・研究活動

センター客員研究員
松村 真司

Gordon L. Noel 教授はオレゴン医科大学の医学教育担当副学部長として、これまで臨床教育を行いつつ、数多くの医学教育カリキュラム開発に関わってきた。Noel 教授は東京大学医学教育国際協力研究センター初代外国人客員教授として平成13年9月より14年3月まで滞在し、これまでの豊富な実践経験を生かした、東京大学を含むわが国の医学教育改善および教育研究活動を行った。当センターの医学教育国際協力部門では医学教育の評価法および医学教育カリキュラム開発に関する研究を行ってきたが、この期間中はこれに加えて Noel 教授との共同教育・研究活動を行ったので報告する。

Noel 教授の専門分野は内科系、とくに医学専門教育に入る前段階における臨床教育プログラム開発である。文部科学省から示された医学教育におけるコア・カリキュラム/共用試験の導入、平成16年度より実施が決定している卒業臨床研修必修化を前に、その方針に沿った医学教

育プログラムの改訂が現在全国の大学医学部・医科大学において急ピッチで進められている。東京大学も例外ではなく、クリニカル・クラークシップの導入、問題基盤型学習法の導入など、様々な新しい試みが始まろうとしている。この時期に、具体的な教育プログラムの開発と、その評価方法について造詣が深く経験豊富な Noel 教授の指導を仰ぐことができたことは幸いであった。

教育プログラム開発活動では現在東京大学の新たなカリキュラム開発に関する助言に加えて、教官に対する Faculty Development を目的とした連続教育講演を毎月1回、計6回行った。講演の第1回は「アメリカにおける医学教育の歴史」をテーマに、米国の医学教育内容とその起源と変遷の概説が行われた。この講義では、今後わが国が国際社会に発信することができる医学教育を探索する上で多いに参考になったと思われる。第2回・第3回講演では、従来の見学中心の臨床教育や講義主体の教育とは異なる教育方略、クリニカル・クラークシップと Problem-based Learning について講演が行われ

た。これらの講演ではそれぞれの背景理論の概説から始まり、教育目標の具体的な設定法、プログラム運営の方法、学生の評価およびカリキュラム評価とカリキュラムのマネジメントにまで内容が及んだ。各地の卒前教育プログラムがこのような教育方略の導入を検討していることから、本講演には学内外から医学教育関係者が参加した。本学でも平成14年度より開始されたクリニカル・クラークシップのカリキュラム開発が行われており、Noel 教授は内外の文献と本学の医学教育担当者との意見交換の上、クリニカル・クラークシップの共通教育プログラム開発を行った。

第4回の講演は「教官は医学生・研修医の臨床技能を正確に評価しているか?」をテーマで行われた。この講演では、臨床技能の評価にばらつきが生じやすいことを示し、到達度の設定・明確化による評価基準の標準化を説いた。評価基準の一般化・共有化により、到達度が明確になり、従来は測定が難しいと思われた学生の臨床技能がこの到達度に照らすことによって形成的評価が可能にな

る。この理論に基づいて、本学のクリニカル・クラークシップでは共通到達目標に沿った評価計画が全面的に導入される予定である。

最後の2回の講演では、医学教育改革の次なるステップとしてどのような戦略を持てばよいかを示した。この2回の講演はそれまでの滞在中に大学医学部および臨床研修病院の医学教育担当者との交流の上でまとめられたわが国の医学教育への貴重な提言である。第5回は「医学生と研修医に対する臨床教育計画の青写真」と題して、一般臨床教育（General Education of Medical Students and Residents）のより一層の推進を、そして最終回は「要約すると：一米国人医学教育者が日本の医学教育に抱いた印象 優れた点と改善できる点」と題して、本学における医学教育改善のための戦略計画（Strategic Planning）の必要性を訴えた。

Noel教授は6ヶ月の間に、東京大学を始めとしたわが国の医学教育の現場をつぶさに見学し、多くの医学教育関係者との交流の上で、わが国の医学教育において持続的に改善を進めるための8つの戦略を提示した。（表1）最終講演でNoel教授は「『医学教育の根本は、医師という職業人を育てる』ということにあり、大学医学部はそのため果たすべき社会責任がある。具体的にどのような責任を果たすべきか、ということに関しては、それぞれの教育機関ごと幅があってもよ

い。しかし、社会に対する説明責任を果たすためには、「どのような医師を育てるのか」という教育理念を明確に提示し、社会から承認を得るべきである。そして、提示された教育理念をすべての教官・学生がともに共有し、教育はそれに全面的にそって行われるべきである。したがって目標設定と評価がすべての教科・教育活動を通じて行われるべきである。目標設定のないところに教育はなく、評価のないところに進歩はない。」と強調された。連続教育講演および医学教育カリキュラム開発においてこの6ヶ月の間にNoel教授が果たした貢献はきわめて大きい。今後は、これらの講演や活動記録を出版していくとともに、Noel教授との共同教育研究計画に基づいた新教育カリキュラムの導入と評価が行われていく予定である。



最終講演

表1 成功する医学部のための8つの戦略

- | | |
|-----|---|
| 戦略1 | 教育目標の達成を支持する教官を育成すること。すぐれた研究者は必ずしもすぐれた教育者ではない。 |
| 戦略2 | 国際レベルで通用する優秀な臨床教育を行う大学を目指した予算配分をすること。 |
| 戦略3 | 大学がめざす理念と目標に合致するような優秀な医学生を選抜すること。 |
| 戦略4 | 医師として求められる専門職としての特徴（Professional Characteristics）を育てるようカリキュラムを活用すること。 |
| 戦略5 | 国際レベルで通用する優秀な臨床医を輩出するプログラムを目指し、幅広い医学生・研修医の総合教育（General Training）の方法を開発すること。 |
| 戦略6 | 卒業臨床研修を最高の臨床教育を目指す人のためのプログラムに変更すること。 |
| 戦略7 | 最高の教育を行うために、医学教育カリキュラム自体を管理すること。 |
| 戦略8 | 変化しつづける医学教育を管理すること。 |

第2回 医学教育ワークショップの報告会について

センター前教授、現客員教授
福原 俊一

第2回医学教育ワークショップは2001年9月5、6日の2日間に渡り、神奈川県湘南国際村センターにて行われた。ワークショップ終了後、その成果を主催者である医学教育改革委員長 加我君孝教授が、桐野高明医学研究科長に報告することを目的として、平成13年12月12日新入院棟15階大会議室において開催された。まず桐野医学研究科長と加我教授より、東大の医学教育全体に関する基本方針と具体的な取り組みについて説明があった後、ワークショップの作業結果報告に移った。このワークショップでは、「東大医学部の学部教育にPBL（Problem Based Learning：症例基盤型学習方法）をどのように取り入れるか」、その目的、導入方法、実際の教育の方法、ケースの開発・検討方法、教育を担当するファシリテーターのトレーニング方法、この教育コースの評価方法、などに関して3つ

のワーキンググループがそれぞれ作業を行った。各グループの代表は、その作業結果を報告した。また、このPBLを2002年後期からM2を対象にしたカリキュラムに導入することが決定しており、医学教育改革委員会の北村助教授が中心となってカリキュラムの決定、ファシリテーターのトレーニング、ケースの開発の作業などを行っており、その報告もあった。

第一部の報告会に引き続き、医学教育国際協力研究センターのノエル外国人客員教授による第3回医学教育講義が開催された。講義の内容は、本ワークショップのテーマにあわせて、PBLに関する海外の動向に関する内容であった。

本報告会のプログラムは下記のとおり。

プログラム

第1部 ワークショップ報告会

司会：福原 俊一

医学教育国際協力研究センター教授

1. あいさつ

桐野 高明 医学系研究科長

2. 「東大の医学教育改革の方針について」

加我 君孝 医学部学部教育改革委員長・
医学教育国際協力研究センター長

3. 第二回医学教育ワークショップ報告

1) 小グループ作業 各グループの代表による報告

A グループ：

「PBLとしてのClinical Problem Solving」
谷口 茂夫 腎臓内分内分泌内科講師

B グループ：

「Medical Science（基礎・臨床の統合型教育）」
吉柄 正雄 老年病科・加齢医学講師

C グループ：

「医師患者関係・医療倫理・医療システムに関するPBLの導入の提言」

門脇 孝 糖尿病代謝内科助教授

2) 「東大医学部における PBL の導入計画について」

北村 聖 臨床検査部助教授
医学教育改革委員PBL 担当

3) 質疑応答

第2部 ノエル教授医学教育連続講義 第3回

座長：小林 廉毅 公衆衛生学教授

講演者：Gordon Noel

医学教育国際協力研究センター-外国人客員教授

タイトル：Problem-based Teaching and Learning in the United States, Canada and England
アメリカ、カナダ、イギリスの PBT と PBL (問題基盤型教授法・学習法)

第1回 医学教育国際協力研究フォーラム開催報告

センター講師

(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

テーマ：IT 時代における医学教育国際協力の展開
日時：2001年12月7日 13:00~16:30
会場：東京大学弥生講堂一条ホール
(農学部正門横)

東京大学医学教育国際協力研究センターは、より効果的で効率的な医学教育方法を幅広い角度から研究し、同時に種々のアクションリサーチを通じて医学教育分野における国際協力に関する研究を行い、そしてこれらの研究から得られた成果を国内外へ発信していくことを使命としている。

医学教育国際協力研究フォーラムでは、医学教育研究・国際協力による「人づくり」を通じて各国の医療や健康に寄与することによって、国際貢献の成果を持続させ、わが国の医学教育分野での国際交流のための重要な役割を果たすには、どのようにしていけばいいのかを建設的かつ具体的に検討する場として企画された。21世紀に大学が果たさなければならぬ役割の中でも、このような医学教育分野はもっとも重要な分野の一つになっていくと考えている。

去る2001年12月7日、「IT 時代における医学教育国際協力の展開」をテーマとして第1回医学教育国際協力研究フォーラムを開催した。

情報技術 (IT) が急速に発達し、インターネットなどを利用した遠隔教育 (Distance Learning) の技法が開発され、国境を越えた医学教育の国際協力、国際開発援助を促進する環境が整備されてきていることは周知の通りである。本フォーラムでは、わが国や欧米における遠隔教育の現状、IT 活用の可能性を検討し、今後の IT を利用した医学教育国際協力の発展のあり方について議論を深めることを目的として開催された。

関川 暁先生 (米国ピッツバーグ大学) と Chailerd Pichitpornchai 先生 (タイ国マヒドン大学) を海外から基調講演者としてお招きして、この分野にご造詣の深い鈴木康之先生、木内貴弘先生、大生定義先生、三好知明先生にご発表いただ



総合討論

き、21世紀におけるわが国の新しい医学教育国際協力の展開について、50名の熱心な参加者の方々とともに、発展的な議論を深めていただいた。近年、飛躍的な進歩を遂げたコンピュータやハイテク機器や情報技術 (IT) を用いた新たな教育技法の開発の成果をどのように医学教育国際協力の展開に結び付けていけばいいのか、具体的な方向性も示唆された。本フォーラムの抄録集は、当センターHP (www.ircme.u-tokyo.ac.jp) にてご覧いただける。

引き続き、平成14年度にも第2回医学教育国際協力研究フォーラムを開催して、「顔のみえる国際協力貢献」としてわが国の医学教育分野における国際協力のあり方について、具体的な提言を発信してまいりたいと計画している。

プログラム

開会あいさつ 13:00-13:05

センター長 加我 君 孝

東京大学医学教育国際協力研究センター

基調講演 13:10-14:30

【座長】福原 俊一

東京大学医学教育国際協力研究センター教授

・Akira Sekikawa (Assistant Professor, Department of Epidemiology, Graduate School of Public Health, University of Pittsburgh, USA) (40分)

“Overview of the Global Health Network Supercourse: Changing the Landscape of Higher Education?”

【座長】小出 大介

国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科助教授

・Chailerd Pichitpornchai (Assistant

Professor, Deputy Dean Medical Informatics, Faculty of Medicine, Siriraj Hospital, Mahidol University, Thailand) (40分)

“IT and Medical Education in South-East Asia: Possible International Cooperation on Medical Education”

シンポジウム 14:40-16:25

「IT 時代における医学教育国際協力の展開」

【座長】水嶋 春朔

東京大学医学教育国際協力研究センター講師

・鈴木 康之

岐阜大学医学部医学教育開発研究センター (MEDC) 教授

インターネット・チュートリアルを試み (15分)

・木内 貴弘

東京大学医学部附属病院中央医療情報部助教授

大学病院医療情報ネットワーク (UMIN) 事務局長

インターネットを利用した医学教育のインフラとしてのUMIN (15分)

・大生 定義

横浜市立市民病院神経内科部長

オーストラリアCCEBの遠隔教育の経験 (15分)

・三好 知明

国立国際医療センター国際医療協力局派遣協力第2課専門官

わが国の医療国際協力における専門家派遣と遠隔支援の可能性 (15分)

・総合討論

開会あいさつ 16:25-16:30

福原 俊一

東京大学医学教育国際協力研究センター教授



質疑応答風景

医学教育国際協力に関する人材情報データベース構築（報告）

センター講師

(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

東京大学医学教育国際協力研究センターは、文部科学省の進める国際教育協力の方針の中で、大学関係者等による国際教育協力の推進のための国際教育協力研究センターの整備充実及び機能強化の一環として設置された。教育分野（広島大学教育開発国際協力研究センター）、農学分野（名古屋大学農学国際教育協力研究センター）の各センターに次いで、医学分野（医・歯・薬・看護・保健・栄養等）におけるわが国の国際教育協力研究の推進拠点として位置付けられている。医学教育分野における国際協力について実践的な観点から研究・開発を行い、加えて国際教育協力をより効果的・効率的に実施し、かつ大学等間の連携・協力を促進するための医学教育国際協力

研究ネットワークの拠点的機能を果たすことを目的としている。

今回、医学分野（医・歯・薬・看護・保健・栄養等）におけるわが国の国際教育協力に貢献可能な人材情報に関するアンケートを、2001年12月に実施した。このアンケートは、各大学医学分野の教官・研究者等を対象に、国際貢献の経験や計画などについての情報を整理しデータベース化し、ODA（政府開発援助）などの我が国の教育協力の推進に協力可能な人材を把握することを目的としている。

アンケート協力依頼を各国公私立大学医学部医学科および看護学科、歯学部、薬学部、看護学部・保健学部など、家政

学部栄養学科など計540学科各学部学科長宛に送付した。これまで（2002年3月20日現在）193学科に所属する教員などからの回答計2225を得て、集計解析をすすめている。

またアンケートにご協力いただける方は、当センターHP（www.ircme.u-tokyo.ac.jp）からアンケート用紙をダウンロードできるので、ご協力いただきたくよろしくお願いいたします。

尚、本アンケート調査で得られた個人情報情報は、個人情報保護の観点から、第三者への情報開示や公開および目的外使用はせず、センター内で厳重に管理される。

	医学	歯学	薬学	看護	その他医療	栄養	合計
送付学科数	80	29	87	70	36	238	540
回答学科数	44	23	30	42	10	38	193
回答者数	1067	762	161	159	15	70	2225
回答学科率(%)	55.0	100.0	32.2	34.5	27.8	16.0	30.2

利根川 進先生来室

センター講師

(医学教育国際協力事業企画調整・情報部門)
水嶋 春朔

昨年に引き続き、今年も東京大学運営諮問委員会に利根川進先生（米国マサチューセッツ工科大学教授、学習と記憶研究センター所長、1989年ノーベル医学・生理学賞受賞）が招聘されることとなり、去る1月7日(月)から12日(土)まで医学教育国際協力研究センターの一室が執務室として用意された。

実質5日間の滞在中に、利根川先生は安田講堂での特別講義「脳科学の世紀」で講師を務められ、運営諮問会議へご出席、また2つの研究室を訪問された。さらに11日(金)には安田講堂での公開討論会「大学の教育研究体制と運営システム」で講演され、加藤紘一衆議院議員



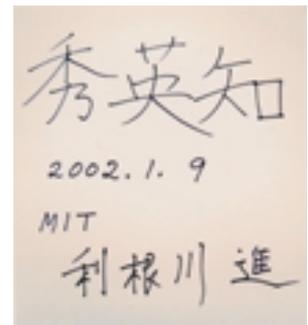
センターにて

左より 利根川先生、水嶋講師、ノエル客員教授

や作家立花隆氏らとともにシンポジストを務められた。そんな多忙なスケジュールの中、合間をぬってセンターでは東大広報誌「淡青」の取材を受け、また外国人客員教授であるゴードン・ノエル教授

とも教育について意見交換をされた。

短い期間ではあったが、利根川先生は非常に精力的に活動をされ、センターにとっても大変刺激的で心に残る1週間となった。



利根川先生 色紙

セミナー「東京大学医学部における医学教育改革の進展」開催報告



Inui 御夫妻と reunion

京都での国際内科学会出席のために来日された Thomas S. Inui 教授（現、Association of American Medical Colleges、写真右から4人目）を招待して、5月20日（月）、東京大学医学部における医学教育改革の進展に関するセミナーを開催した。Inui 教授は、平成12年度に文部科学省招聘教授としてハーバード医科

大学から当センターに3ヶ月招聘され、東京大学医学部における医学教育カリキュラム改革を目的とするプロジェクトチーム（イヌイプロジェクト）をリードして、カリキュラム改革の提言を精力的に構築し、その成果を報告書にまとめている。本セミナーは、その後の「進展」を Inui 教授に報告するために企画された。セミ

ナーでは、松村真司客員研究員「教育評価プロジェクト」、高本眞一教授（教務委員会委員長、写真左から3人目）「東京大学医学部における医学教育改革の進

展」、加我君孝センター長（写真右から3人目）「今後の展望、センター客員教授への期待」の各発表がなされ、Inui教授から「東京大学医学部における医学教育

改革への期待」として、短期間で多くの成果をあげている点など高い評価を含めたコメントがあった。

医学教育センターを辞するにあたり



センター前教授、現客員教授
京都大学医学研究科 社会健康医学系専攻教授
福原 俊一

このたび、医学教育センターを辞するにあたり、お世話になりました皆様へ御礼の気持ちをこめまして、ひとことご挨拶を申し上げます。

センター設置の経緯：

今から遡ること約5年前、医学部国際交流室に在籍しておりました頃、開原成允 初代国際交流室長のお勧めがあり、黒川清 国際交流室長（当時）のご指示で医学教育国際協力研究センターの概算要求を作成することになりました。しかし二年連続して要求は通らずほぼあきらめておりました丁度その頃、京都大学医学研究科に新しい大学院独立専攻設置が決まり、私はその一講座の教官に選出されました。国際交流室長の山本一彦教授や、桐野高明医学系研究科長にも相談しご許可も得て京大に赴任することが内定し、その準備をしておりましたところ、あきらめながらも提出しておりました東大センターの要求が年末に認められるという事態がおきました。すぐに運営準備委員会が組織され、加我教授がセンター長を兼任することが決定しました。加我教授よりセンターの主任を私に併任するようにとのご依頼を受け、かなり迷いましたが、1年の期限でお引き受けすることにしました。

センターの立ち上げ：

設立当初は、加我センター長、松村真

司助手（現客員研究員）と私の3人だけでした。秋になって医学教育国際協力事業企画調整・情報部門に水嶋講師を迎え、センターも国際協力に関する部門における活動を始めることができ、センターに求められている機能を発揮できる恰好が何とかつき始めました。1年の併任の勤めを終え、京大に専任と思っておりましたところ、加我センター長にあと1年併任延長のご依頼を受けました。2年の併任という前例はあまりないようで、確かに2年目ともなりますと時間的な余裕にとぼしく、周りのスタッフにもご迷惑をおかけすることが多く本意な思いもいたしました。しかし25年前に医学教育に失望し渡米して臨床研修を受けた身にとりましては、医学教育は私の原点でもあり、わが国における医学教育改革の歴史的端緒となるであろう当センターの立ち上げに参加するという貴重な機会を与えていただいたことに今は大変感謝している次第です。

センターでの活動：

2年間のセンターでの活動の詳細は、近々2年間の年報（biennial）として出版予定ですので、これをご参照いただきたいと存じます。上記のような変則的状況のため、東大の皆様のご期待に応えられる程の成果を上げられなかったかもしれませんが、いくつかの活動を行いました。センターは小世帯ですが、医学教育国際協力研究部門、医学教育国際協力事業企画調整・情報部門、外国人客員教授部門の3部門で構成されています。私はセンター全体の運営にかかわるとともに、研究としましては医学教育方法・評価に関して協力しました。松村先生を中心に、外国人特別招聘教授として3ヶ月滞在された Thomas Inui 先生と共に、評価指導の開発・評価の作業に携わりました。また、12年度、13年度の2年にわたり開催された医学教育ワークショップに当センターが協力しました。初代外国人客員教授の Gordon Noel 教授は、6ヶ月間のご滞在中、精力的に活動されました。毎月行われた連続講義では、医学教育を取り巻く米国の厳しい動向を解説され、これが早晚わが国にも形こそ違え起きることであり、これに備える必要があること、そのためには何よりも医学教育の基本理念（ミッション）とこれにもとづい

た明確な教育目標の設定が重要であること、そして教育を戦略的にマネージし常に改善するための組織体制が重要であること、を強調されました。（Inui 教授も全く同じ事をおっしゃいました）これは記録され、現在 Noel Report として出版するべく私が整理作業中です。またクリニカルクラークシップの教育目標設定と成果の評価に関する研究にもご参加、ご指導いただきました。作業のなかで私も多く学ばせていただきました。

センターの将来：

今日、わが国において医学教育がにわかに注目されるようになりました。25年前の医学生であったころ、いや10年前と比べても、隔世の感をおぼえます。このような情勢にあつて、当センターの設置は歴史的なターニングポイントになる可能性があり、当センターがわが国の医学教育改善のための研究拠点になる大きなポテンシャルを持っていると思います。また国際という広い視野をもって、先進国や途上国との医学教育に関する交流の拠点になることも期待されます。さらに嬉しいことに、いまや東大の学生や卒業生の若手にも、医学教育に興味をもたれる方が徐々に現われてきており、今後は彼（女）らの将来の活躍にも大いに期待するところです。東大およびセンターのますますのご発展を心よりお祈りしております。なお、私は、今年の3月末で東大併任を解かれましたが、加我センター長の要請により、客員教授としてこれまでの研究を継続するとともに、外国人客員教授の Search Committee の一員として、しばらくの間協力させていただくことになりました。京都大学の新しい大学院専攻におきましても、主に社会人（臨床医や医療関係者）を対象に、臨床疫学やアウトカム研究等の方法と実践に関して、引き続き教育に関わっていく所存です。

最後にこれまでお世話になりました東京大学医学部の多くの諸先生方、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。特に加我センター長、水嶋講師、松村先生、そしてセンターの事務補佐スタッフの皆さんの暖かいご支援とご助力なしにはこれまでやってこれなかったと思います。あらためて厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



センタースタッフ、右より 水嶋、加我センター長、松村、永久保、柿本、平田、福原

センター日誌：2001年10月 2002年 5月

2001年

- 10月 1日 外国人客員教授 Gordon L. Noel 教授着任
4日 文部科学省大臣官房国際課 第1回国際教育協力懇談会出席（水嶋）
31日 Gordon L. Noel 教授連続講義第1回
- 11月 7日 文部科学省大臣官房国際課 第2回国際教育協力懇談会出席（水嶋）
14日 Gordon L. Noel 教授連続講義第2回
28日 文部科学省大臣官房国際課 第3回国際教育協力懇談会出席（水嶋）
30日 基礎医学 授業・実習の評価（第1回 M2 学生に対するアンケート調査の集計）を発表
医学科臨床実習の評価（第三回 M4 学生に対するアンケート調査の集計）を発表
- 12月 5日 13年度第2回センター運営委員会
7日 第一回 医学教育国際協力研究フォーラム開催（農学部弥生講堂）
10日 第二回 医学教育ワークショップ報告会
Gordon L. Noel教授連続講義第3回
26日 医学教育分野における国際協力人材情報データベース構築のアンケート調査

2002年

- 1月 7～11日 利根川進 MIT 教授 センター滞在
23日 Gordon L. Noel教授連続講義第4回
- 2月 6日 13年度第3回センター運営委員会
20日 Gordon L. Noel 教授連続講義第5回（MINCS 中継）
- 3月 20日 Gordon L. Noel教授連続講義最終回（MINCS 中継）
22日 バイオエシックスと医学教育シリーズ第1回シンポジウム「生命倫理と緩和医療」主催
- 4月 24日 文部科学省大臣官房国際課 第5回国際教育協力懇談会出席（水嶋）
- 5月 20日 文部科学省大臣官房国際課 第6回国際教育協力懇談会出席（水嶋）
20日 Thomas. S. Inui 教授セミナー「東京大学医学部における医学教育改革の進展」

編集後記

このたび設立当初から2年間、主任教授としてご尽力された福原先生が退任されることになりました。小さなセンターの中で福原先生の存在は計り知れないものがありましたが、今後は客員教授としてサポートしていただくことになりました。また、去る3月22日（金）「バイオエシックスと医学教育シリーズ」の第1回シンポジウム「生命倫理と緩和医療」を当センター主催で開催いたしました。センターもいよいよ3年目を迎え、様々な事業や研究活動、学内外の多くの先生方との交流などを通して、より広い視野に立った未来につながる活動をご報告していけるよう励みたいと思います。（平）

発行 2002年5月31日
 発行人 加我君孝
 発行所 東京大学医学教育国際協力研究センター
 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
 TEL 03-5841-3583
 FAX 03-5802-1845
 印刷所 株式会社 学術社